



第百十七號 (第十一卷) 昭和六年一月

“ 1931年 ”

といふ此の歳は、元旦が明けると早々、まことに賑々しく多忙な年である。まづ一月六日は木星の對衝。同二十七日は火星の對衝。又、同三十一日にはエロスが最近距離に来る。實に、觀測者たちに取つては、盆と御正月とが一時にやつて來たやうな忙しさである。木星は何時見ても面白いものであるが、特に二三年前からは、赤道北邊に激しい氣流と、輝やかなしい白斑とが出現して、其の筋の専門家たちを苛立たせてゐる。火星は、距離から言へば、最も遠い對衝時期に當つてゐるのであるから、一般の人々には餘り騒がれないかも知れないが、しかし、常日頃、此の星の觀察を怠らない人々に取つては、何と言つても、火星の北極方面が我が地球に顔をむけてゐる珍しい時なので、300倍以上の望遠鏡を使へば、收獲は多からう。

エロスの觀測は今が「書き入れ時」である。獅子座を縦斷して、セキスタントからヒドラへ抜けようと急いでゐる此の星を、三十年間待ちに待つた全世界の觀測者たちは、長大な屈折機や、大口徑の反射機など、あらゆる測觀武器を用ゐて、二月の末ごろまでに、出来るだけの研究材料を獲やうとあせつてゐる。第一の目的は此の星の視差の觀測、第二の目的は其の光輝變動の觀測、又、第三の目的は此の星の近いのを利用して、我が月の質量の決定である。此等各方面の觀測が、何れも首尾よく遂行されて、近く優秀な成績が擧げられ、「1931年」が天文學史上に特筆されるに至らんことが望ましい。此の期に因んで、今回始めて學界に試用される東京三鷹

の 650ミリ屈折機と、花山の 46センチ反射機の成功を祈る。更に又、1930年末に、我が若き會員古畑君によつて早くも見つけられたエロスの短週期變光性が、願はくば同君及び我が會員たちによつて、徹底的に觀測研究され、日本の天文學界の誇りとして之れが永く學術史上に残されるに至らんことを。

此の 1931年には、日食が三回と、月食が二回ある。月食は、四月三日と、九月二十七日とで、何れも早曉の西の空に低く見える皆既食である。兩回とも、月食の光輝と地球上の氣象との關係を研究するのに好い状態である。日食は、四月十八日にアジア大陸の東部で、又、九月十二日にはベリリング海峽附近で、又、十月十一日には南米の南端から南極にわたり、何れも部分食である。其のうち、四月のものだけが樺太、朝鮮、滿洲あたりで見えるが、ほかは皆、我が日本では縁の無いものばかり。

彗星は、エンク彗星が第三十八回目の歸來を六月にするほか、土星族のニウジミン彗星も歸つて來る筈である。其の以外に、多くの新彗星が各地で發見されるだろうことは、勿論豫期すべきであるが。

彗星に因んで、流星界に、かの有名な獅子座の大流星雨が、も早やソロソロ大きく襲來して來る時期に近づきつゝある。第十九世紀中、1833年、1866年、1899年と、三十三年おきに盛んに現はれた歴史から推して、こんどは1932年であるが、今年あたりから、流星の専門家は特別な注意が必要である。(1931年の「天文年鑑」より)

